

[芸術教育記録]

## リーダー育成における芸術の役割

—平成28年度小原國芳教育學術奨励基金助成「芸術と人材育成」  
講演会・演奏会—

### The Role of Arts in Leadership Education

講演会：村山にな\* 林 三雄\*\* 芦澤成光\*\*\*\*  
中島千絵\* 藤枝由美子\*\*  
演奏会：小佐野 圭\*\*\* 野本由紀夫\* 西上純平\*\*\*  
Nina Murayama, Mitsuo Hayashi, Shigemitsu Ashizawa,  
Chie Nakajima, Yumiko Fujieda  
Kei Osano, Yukio Nomoto and Junpei Nishigami

#### I. 主旨

本企画の主旨は、教養（リベラルアート）を基盤とする人材育成の推進とドラッカーのリーダー育成の実践方法における芸術の役割を明らかにすることにある。人材育成には、理論と実践の両方が求められるため、講演と演奏を組み合わせた企画とした。ドラッカー理論の研究者であるとともにチェリストでもあるカリフォルニア州立大学講師のカレン・リンクレター先生と国内最大のオペラ歌手組織の非営利団体二期会CPO（事業統括者）の福水託氏を招聘した講演会とそれに続き、リンクレター先生のチェロと玉川大学芸術学部学生によるピアノの共演とオペラの演奏会を実施した。

講演会を通じてリーダーシップは生まれ持つての資質ではなく誰もが学べるスキルであると同時に、自己の強みを生かし、芸術に共鳴する心と柔軟な発想力は他者と異文化間チームにおける共同作業を円滑に進めるうえでプラスに働くことを訴えた。演奏会では、比喩的にリーダーとフォロワーの関係をチェロとピアノの掛け合いの実演で伝え、オペラ歌手の歌唱力は才能と強みが発揮される芸術の世界を立証した。全学部の在校生と教職員、一般、ドラッカー研究者を対象とする幅広い層に向けて、21世紀の人材育成において芸術が寄与する力を理論と実践の両面から発信することを狙いとした。

#### II. 次第

「芸術と人材育成」2016年11月5日（土）共催：芸術学部と経営学部

所属：\* 玉川大学芸術学部芸術教育学科

受領日 2016年11月30日

\*\* 玉川大学芸術学部メディア・デザイン学科

\*\*\* 玉川大学芸術学部パフォーミング・アーツ学科

\*\*\*\* 玉川大学経営学部国際経営学科

講演会：村山にな 林 三雄 芦澤成光 中島千絵 藤枝由美子 演奏会：小佐野圭 野本由紀夫 西上純平  
Nina Murayama, Mitsuo Hayashi, Shigemitsu Ashizawa, Chie Nakajima, Yumiko Fujieda Kei Osano, Yukio Nomoto, Junpei Nishigami

於：玉川大学UCH106教室 午後14：00-17：00

全体進行 芸術教育学科 中島千絵挨拶 芸術学部長 小山正

講演：「ドロッカー：芸術とリーダーシップ教育」カレンE. リンクレター

解説と質疑応答 芸術教育学科 村山にな

休憩

講演：「文化が寄与する経済価値」二期会CPO福水託

演奏会：司会 芸術教育学科 野本由紀夫

シューマン：アダージョとアレグロ 作品70(チェロ版)チェロ：リンクレター、ピアノ：藤山奈津見(パフォーミングアーツ学科4年)

マスカーニ：「花占い」とドヴォルザーク：歌劇《ルサルカ》より「月に寄せる歌」ソプラノ：北原瑠美(東京二期会)、ピアノ：前田勝則

プッチーニ：歌劇《ジャンニ・スキッキ》より「私の愛しいお父さん」ソプラノ：北原、ピアノ：前田、チェロ：リンクレター

アンコール：サン＝サーンス《動物の謝肉祭》より「白鳥」チェロ：リンクレター、ピアノ：藤山  
閉会

懇親会 於：玉川大学KEYAKI 2階 午後17：45-19：45

挨拶と乾杯 経営学部長 大西清彦

企画と交渉と解説通訳：村山にな (AE学科)、ピアノ指導と全体顧問：小佐野圭 (PA学科)、演奏会の統括と司会：野本由紀夫 (AE学科)、企画と記録と討議：林三雄 (MD学科)と芦澤成光 (経営学部)、企画と室内デザインと全体司会進行：中島千絵 (AE学科)、企画と全体統括：藤枝由美子 (MD学科)、舞台統括と学生スタッフ指導：西上純平 (PA学科)、ピアノ演奏：藤山奈津見 (PA学科4年)、学生スタッフ：藤田麻那 (PA学科3年)、斎藤愛加 (農学部4年)、荒川晴人 (経営学部4年)、譜めくりと楽器調整：谷田部綾菜 (芸術学部専攻科)、通訳とアテンド：長尾マリア (芸術学部卒業生)

### Ⅲ. 講演会の概要

ドロッカーと芸術の関係について、会場には事前準備もなく臨んだ学生が多かったので、講演会の冒頭で村山から二つの事例を紹介し導入とした。その内容は、ドロッカー夫妻が日本の水墨画の収集家であり特に禅画に描かれた高僧の境地に惹かれていたことと高齢の作曲家ヴェルディのオペラに感懐したドロッカーは、年齢に関係なく終わりのない芸術家のチャレンジ精神をリーダーシップの手本としたのではないかという問題提起でもあった。

リンクレター先生の講演内容は、マネジメントが芸術 (Arts) と科学 (Science) の両分野にまたがり、ドロッカーは人とそのコミュニティーを研究の対象としていたことから解説を始め、リーダー研究の経緯、ドロッカーのリーダーシップ5原則、そして、人材育成における芸術の役割を述べた。ドロッカーによるとリーダー育成には強みを生かすことと真摯であることが求められる。日本の水墨画の鑑賞体験によって、ドロッカーは日本人、日本の文化と組織に対する理解を深めた。人材育成における芸術の役割は、物事や事象を断片ではなく総合的に捉え解釈できる、多様性に対応できる、人に共感できる感受性ゆたかな心などがあげられた。



講演：リンクレーター氏  
UCH106教室 2016年11月5日  
撮影：林三雄

#### IV. 演奏会の概要

企業の役員の儲け主義に失望し、ニューヨークからリベラルアーツ教育で名高いカリフォルニアのクレアモント大学に活動拠点を移したドラッカーは、非営利団体の研究に勤しんだ。非営利団体二期会の福水氏の講演は、芸術文化振興において、芸術の表現者とその受け手の両方に共有される価値「人は幸せになるために生まれてきた」が提示された。感性に訴える文化価値があり経済が誘引される示唆に富む内容であるとともに演奏会の導入となった。本企画は福水氏の提言で、オペラの実演とリンクレーター先生との共演も実現した。

演奏会では、野本由紀夫の司会で、講演内容にあったリーダーとフォロワーの関係をリンクレーター先生のチェロと小佐野圭の指導による学生の藤山奈津見さんとのピアノの掛け合いで表現したことを解説するとともに、二期会の若手歌手へのインタビューも交えて、場面や情景を表現する歌声は鑑賞者に芸術の強みである想像力と解釈をうながし、芸術と人材育成の結びつきを伝える試みでもあった。来場者と演奏者の双方にとって、教室環境での演奏とオペラの実演と鑑賞という稀な体験となり、心に響く音と歌声の測りきれない効果が人材育成の面で継続することを期待している。



演奏会 ピアノ：藤山奈津見（PA学科4年） チェロ：リンクレーター  
ソプラノ：北原瑠美（東京二期会）ピアノ：前田勝則  
撮影：林三雄

## V. 考察

下記に事業遂行者のそれぞれの専門分野と担当領域をふまえた考察をまとめる。中島と林三雄はデザイナーとしての感性から、ドラッカーのリーダーシップ原則とマネジメントの発想がどのようにデザインの構想と作業にかかわるのかわらなくなったことが述べられている。講演会の内容に関して、芦澤は経営学の視座から芸術の「解釈」や「直観的な統合」といった特徴が把握できたが、具体例の提示を求めている。一方、藤枝は、来館者アンケートを分析と考察し、人材育成に芸術の果たす役割の重要性について教育効果があったことを証明している。小佐野は招聘講師による学生の音楽指導と国際交流の可能性を見据え、西上は、舞台マネジメントの経験を重ねる中で指導者として後輩人材を育てる役割が綴られている。野本からは、学部と学科が横断する今回の企画趣旨に賛同しつつも、経営の分野であるマーケティングの導入による芸術家の自立支援や学生による企画運営による今後の「芸術と人材育成」の指導提案を提示している。

### ドラッカーを惹き付けた日本絵画の世界

芸術学部メディア・デザイン学科 林三雄

このたびの事業のなかで、私がいちばん興味を惹かれた点は、ドラッカーがどのように芸術を捉えていたのかということであった。これについて、11月2日にラーニング・コモンズで行われた研究担当教員を中心とするワークショップの中でリンクレーター氏からドラッカーの授業で示された事例の紹介が行われたなかに、とてもわかりやすい内容のものがあった。

交響楽団の演奏を聞いた工業系技術者によるレポートの話であり、技術者は経済的な効率面から演奏を分析すると、「不必要に多い演奏者」「繰り返しの多い楽譜」などを問題視し、これを解決することで、より効率の良い演奏が実現出来るという提案をした。この事例から何を学ぶか？ という設問だった。

もちろん、芸術の本質を無視した笑い話のような内容なのだが、経済性や効率という考え方では解決出来ない部分にこそ芸術の本質があるということドラッカーはわかっていたし、おそらく経営学の世界においても効率主義だけでは解決のつかない問題をふくんでいることを示そうとしたのではないかと考えられる。

ドラッカーは日本美術に心酔し、そのコレクションも多いと聞いた。リンクレーター氏からは授業内で日本美術をドラッカーが解説する場面もあったとの説明も聞かれた。ドラッカーが墨絵などの日本絵画に惹かれた要因として、正確な遠近法に基づく空間構成で描かれた西洋絵画にはない、「幽玄」や「間」「気」をも描き出す日本絵画の世界観を知覚することで「曖昧さ」の価値を重視し、経営学の宇宙の広がり求めたのではないかと推察する。

### デザイン的思考とマネジメント

芸術学部芸術教育学科 中島千絵

この度のリンクレーター氏のワークショップと講演に、私がイメージを重ねたものは、「デザインの思考」であった。この数年間特に、デザインシンキングというワードが目され、製品開発のみならず問題解決に向けて用いられている。デザイン的思考はデザイン黎明期から、ニーズの変遷、社会の特性、デザイナーの個性とともに摸索され続けてきた。デザインプロセスに内在する力に近年注目が集まっていることは、今回の研究事業によって紹介された、ドラッカーの提唱していた「芸術とマネジメントの関係性」に同期するものと感じられた次第である。

ドラッカーがマネジメントの対象を「共通目的のもと結束する人のコミュニティー」とする見方は、すべてのデザインが人のためのクリエイティブワークであることに通ずる。ワークショップと講演会で紹介されたドラッカーの5つの資質と実践は、そのまま多くのデザイナーの信条と一致する。

- 1 (デザイナーは、) 正しさに責任を持ち、アカウントビリティを全うする。
- 2 (デザイナーは、) 自己の強みに集中し、人々に自己の強みで貢献する。
- 3 (デザイナーは、) 人としての真摯さ、組織の価値観を保ち、人々の信頼を得る。
- 4 (デザイナーは、) 人々を生かし、成長させ、心を満たす。
- 5 (デザイナーは、) 危機マネジメントを実践する。

今回の講演会では、講演と公演、左脳と右脳の両面から情報を提供するユニークな研究事業だったとの評価も多く頂いた。その時間の中で私のように、聴衆はそれぞれのフィールドにおいてマネジメントを考え、そこから拡張して芸術とマネジメントの関係性を考えることができたのではないかと思う。

### リンクレター氏講演会「ドラッカー芸術と人材育成」についての報告

経営学部国際経営学科 芦澤成光

リンクレター氏は芸術が持つ人の感性、知覚についての表現が、人に共感を生み出し、多面的な人の理解を促すという側面を持つ点を指摘する。その一方で芸術の役割として、複雑な経験の解釈、あるいは複雑な経験を直観的に把握できるようにすることであるとしている。しかし、その具体的な内容については、必ずしも明確にはなっていない。人の感覚、感性を理解するうえで芸術が提供するものが重要である点は理解できる。しかし、その具体的内容について、さらに事例等を利用して、説明をすることが必要と言える。

リンクレター先生の指摘では、米国では所得格差が広がり、そのことによって教育の役割が本来のものから離れ、「高収入の就職先」を得ることになっている点が指摘されていた。そのため大学が職業訓練校のようになっていく。日本と同様に、科学、技術、工学と数学分野は高収入の就職先が得られることが約束されているが、人文科学はそれが約束されない分野としてみなされるようになっていく。経営学はその中には入っていない。日本で言われる経営学は、この視点から捉えると、どのように位置づけられるのだろうか。この点でリンクレター氏の興味深い発言が最後の方でなされている。

芸術が提供する判断力、柔軟性、癒やしからリーダーは学べるとされている。現代資本主義の社会では、企業のリーダーが短期的利益視点で行動する傾向がある。さらには、企業の非倫理的な行動を生み出している。その中心にいるのもリーダーである。このような状況に対して、芸術は重要な役割を果たす可能性を持つとされている。そしてリンクレター氏は芸術とリーダーシップをつなぐことに対して希望を持っていることを明らかにしている。芸術から学べる点として以下が指摘されている。人の本質、価値観、道徳の問い、分析だけでなく解釈と統合である。以上の指摘のさらなる具体化が必要と考えられる。

### 教育的効果について

芸術学部メディア・デザイン学科 藤枝由美子

本イベントの教育的効果を、主として来場者アンケートを基に考察し、事業の意義を明らかにしたい。130名の参加者のうち、アンケートに答えたのは、84名(64.6%)、その構成は授業の一環として参加した学生が59名、一般学生が6名、教職員6名、一般が12名であった。

そのうち、ドラッカーを全く知らなかったのが20名、名前だけが36名、内容を理解していたのが

17名、よく理解していたのが10名であった。そして、一般参加者のきっかけは、日本経営学会での宣伝が1名、webサイトから1名、その他は友人知人の紹介であり、ドラッカーについては未知の方から良く知っている方まで予備知識に大きな差があった。

そのような状況で、本イベントを通して人材育成に芸術が重要であると理解できた方は25名、少し理解できた方は45名、理解できなかった方は13名であった。また、61名が人材育成と芸術との関係を考えるきっかけになったと答えた。

つまり、全くドラッカーを知らないか、名前だけ知っていた参加者が66.6%を占める状況の中、83.3%の方に人材育成における芸術の重要性をご理解いただき、また72.6%の方に同テーマについて考察のきっかけを与えることができた。コメントによると講演の内容もさることながら、演奏についての評判が高く、講演と演奏、理論と実践を組み合わせた点が、このイベントを受け入れやすくし、教育的効果を高めたと考えられる。

なお企画・運営に携わった主催者側としては、上述の成果を上げられた点は良かったが、メンバーの組織化への着手の遅れ、相互理解不足が課題として残った。我々にとってもドラッカーが述べるところの強みを活かしたマネジメントを実践的に学ぶ機会となった。

#### 「リンクレーター先生と学生によるコラボレーション」について

芸術学部パフォーミング・アーツ学科 小佐野 圭

リンクレーター先生のチェロと本学学生のピアノの共演で留意した点は3つあります。「呼吸」と「アーティキュレーション（奏法）」と「英語力」です。

合奏では「チームワーク（協調性・協働の喜び）とリーダーシップ（主体性・能動的態度）」の2つの視点が重要ですが、事前の合わせにおいては本企画の主旨にあるように、音楽を通して異文化間のコミュニケーションを図ることが可能であり、改めて、芸術の幅広い分野での応用力を実感しました。

日頃から、良いアンサンブルを行うために指導していることは、相手をよく「見ること」「聴くこと」「感じあうこと」です。その場の臨機応変な対応力も重要な要素となることは言うまでもなく、これらはどの分野に進んでも、これからの時代を担う学生たちにとって強みとなるコンテンツであり、社会に貢献できる人材育成の基盤となっていると確信しています。

今回の企画は、まさに昨今取り沙汰されている「アクティブ・ラーニング」の視点においても合致していますが、芸術分野で学ぶ学生たちにとってはこれまでも様々な発表を実践することが常であり、今後社会の中で益々その有益性を認識されていくことを望んで止みません。

今後の課題としては、海外からの演奏家と共演することや、マスタークラスのレッスンを実施する時に、教員のみならず学生自ら英語力を鍛えておく努力は必須だと考えます。

最後に、譜めくりに協力いただいた谷田部綾菜さんにも感謝申し上げます。また、リンクレーター先生の使用したチェロは玉川大学所有の楽器でしたが、普段、あまり使用していないので鳴りが悪く彼女が数日前から弾きこんでくださったことも忘れてはなりません。本企画を立ち上げてくださった村山にな先生に深謝申し上げます。

#### 演奏会におけるマネジメントとステージマネージャーの役割について

芸術学部パフォーミング・アーツ学科 西上純平

舞台統括をする上で、この講演会と演奏会の当日まで以下の業務を行った。タイムテーブルの作成及びセッティング表の作成、控え室等の教室の運用方法である。当日はこれらの資料を基にリハーサル時にセッティングの最終調整、本番進行中の奏者の出入りのタイミングを行った。いずれも特に配

慮したことは奏者に演奏本番までのストレスを出来るだけ無くし、ベストコンディションで演奏に臨める環境をつくることである。講演会、演奏会をマネジメントするうえで難しいことは、いくら綿密に資料等を作成したとしても、本番当日では予期していないアクシデントでその場の判断に迫られてしまうことである。このような事態で統括する者が右往左往してしまうと困るのは、奏者であり、余計なストレスが生じ、結果本番の演奏にも支障をきたすことにもなりかねないからである。そうなってしまうと、奏者はもちろん、聴きにきた観衆にまで影響を及ぼしてしまう恐れもある。今回の演奏会でとくに難しかったことは、会場、舞台の作り方である。今回の教室は舞台で言う上手に扉があり、下手に演台、操作卓がある。その場合、司会者とステージマネージャーとの距離は遠くなってしまい、コンタクトが取りづらくなる。そのため、リハーサル時では、福水氏からの助言もいただき、ランスルー（演奏はせず、人だけの動きを通すこと）を行った。こうすることで、奏者は普段のコンサートステージとは異なる会場でも、本番での動き方のイメージを持ち、演奏に臨むことができる。演奏会でマネジメントするうえで難しいことは、人対人ということである。また目には見えない、阿吽の呼吸、雰囲気といったところから、その場の状況を察知し判断を求められるということ、今回の演奏会でも改めて実感した。今後の課題は、上記でも取り上げたように University Concert Hall 2016内の校舎運用、演奏会時の運用方法について検討をしていくことである。

## 芸術実践のマネジメントとプロデュースについて

芸術学部芸術教育学科 野本由紀夫

筆者に課せられた課題は、①リンクレター氏の講演「ドラッカー：芸術とリーダーシップ教育」および福水氏の講演「文化が寄与する経済価値」の内容をふまえつつ、②会全体のテーマ「芸術と人材育成」へとインテグレートして、③「演奏会」の形でリアライズすることであった。当日のお客様には、ただの司会者にしか見えなかったかもしれないが、このリアライズのためには、本番までの芸術実践のマネジメントと周到的プロデュースを行う必要があった。

経営学部の芦澤成光が「具体的内容について、さらに事例等を利用して、説明をすることが必要」というのも当然で、経営学部の学生や教員がこの芸術実践のマネジメントとプロデュースのプロセスに参加できていれば、会の趣旨は「理論と実践」の両面から実現できたであろう。

演奏会のプロデュースとマネジメントは、本来は「音楽監督」というリーダーを置かなければ実施は困難を極める。小原基金の当初メンバーに音楽系教員がいなかったため、当然「音楽監督」は不在であり、筆者はその組織化の再構築から始めなければならなかった（筆者は、音楽監督ではない）。

音楽監督は、当日のすべての出演者、裏方の動きをイメージし、演奏会がどのように進行するか、完全にシミュレーションする力が求められる。そのシミュレーションから、必要な部屋数、アテンドのケータリング、小道具、照明、出演者の登場のタイミングと立ち位置、演奏の場ミリ（立ち位置）とアンサンブル・レッスン、曲目決め、曲順とMCを入れる位置、出演者へのインタビューのタイミングと内容およびその長さ、全体のタイムマネジメント、曲目解説と司会の内容、拍手のタイミングとカーテンコール、締め挨拶までを決定していく。じつは、舞台の控えスペースで、演奏者が最も気持ちの乗れるタイミングで拍手を真っ先にはじめるなどの「演出」さえ行うのである。ほとんどテレビ番組の制作と同じプロデュースが必要なのである。今回はさらに、リンクレター講演の英文も、事前に読み込む必要があった。

演奏会マネジメントには、関係者どうしの事前打ち合わせも不可欠である。今回は音楽系の教員・助手が当初メンバーでなかったために、経営学部との共働をまったく行うことができなかったことは、心残りである。今後は、全国の芸術系大学においてすでにカリキュラム化されているアート・マネジ



事前の音合わせ UCH音楽練習室 2016年11月3日



演奏会リハーサル、福水託氏によるランスルー  
UCH106教室 2016年11月5日 撮影：村山にな

メント講座の調査も必要だろう。また、学内の音楽マネジメント体制の確立は急務ではないだろうか。

## VI. 成果と今後の課題

講演会と演奏会を組み合わせ、理論と実践の両面から芸術による人材育成のはたらきを五感で表現し伝える試みであったが、事前にリンクレーター先生との講演内容の調整を入念に進めるとともに、学生のピアノとリンクレーター先生のチェロの共演の準備も夏期休暇中に練習時間が十分に取れるように配慮した。7月からの準備期間と村山の事前説明が不十分ななかで無事終了できたのは、携わったすべての先生がたと助手がそれぞれの持ち前を存分に発揮してくださったおかげである。代表の村山は演奏会の実施に精通していなかったため、演奏会プロデュースおよび全体の舞台マネジメントの面で音楽系の教員と助手に大きな負担が生じてしまったことは反省点である。

講演会と演奏会の企画内容とプログラムもさることながら、事業のマネジメントの面で各自のポテンシャルが実地に問われ、現場において即断の知性と起動力が試される緊張感あふれる学術経験でもあった。村山は出演者でもあったので全体の舞台進行の指揮をとる立場にはなく、小佐野と野本から演奏会に至るまでや当日の表舞台と裏のいろはの指導を頂戴したが、実際の会場と楽屋の設営準備と関係者への全体説明は藤枝が実施し、楽屋と連携をとってタイミングを計りつつ出演者を会場へ移動し照明とスクリーンや備品の配置交換などを西上と学生スタッフたちが周到につかさどった。当日の会場で関係者全員がそれぞれの能力を出しきることではげんにリーダーシップをとる構図ができていた。特に、演奏会に精通した小佐野からリンクレーター氏のアテンドの長尾マリアさんに、休憩時間は講演から演奏に気持ちを切り替えて整える為に面会を遮断する指示、野本は楽屋に足を運び二期会の福水氏や出演者たち、およびマネージャーと出演前に対話の時間をとってから本番に臨み、講演会と演奏会を巧みに組み合わせるといったプロの仕事術を全うした。

今回の成果は、①分野の異なる先生がたと協働することで、異なる視点と意見とふりかえりから学術的な交流が実現したこと、②人材育成における芸術の役割を広く発信できたこと、③異分野と連携する企画と実施によりチャレンジ精神を互いに共有できたことがあげられる。一方、知的レベルに大きな差がある幅広い観衆をすべて満足させることは困難であること、特に英語と日本語の両言語の講演は40分以内（解説通訳を含めて80分）にならざるを得ず、専門性の高い内容や具体的な解説は期待できない。また、芸術とリーダーシップの繋がり、普段から音楽や絵画鑑賞などを経験して感性を磨いておかないと、言葉や話だけで理解しようとするとなりにくい感覚的な側面があることも来



場者からのアンケートの記述からも把握できた。今回の企画は、学科と学部を横断する自由で知的な楽しさと活力に満ちていたが、意思疎通の混乱も生じ、演奏会を円滑に進めるには効率的な組織体制づくりと連絡周知を徹底する準備も必要であった。また、講演会と演奏会の内容が連動する視聴覚にうったえかける教育上の相乗効果は、今後の事業と授業企画と実施の指針となった。

#### 謝辞

本事業の遂行にあたり、小原國芳教育学術奨励基金からの助成を賜ったことに深く感謝の意を表します。また、コスモス祭直前の多忙期にも関わらず、講演会と懇親会では、芸術学部長の小山正先生と経営学部長の大西清彦先生からご挨拶を頂戴しました。芸術学部と経営学部の共催として多くの先生がたからもご支援とご参加が得られましたことに御礼申し上げます。

※本記録は、「V. 考察」を分担執筆とし、他章は事業推進者の先生がたと助手との意見交換をふまえて代表の村山が記載しました。